

王船山の阮籍「詠懷詩」評

鈴木敏雄

序言

王船山は『古詩評選』に阮籍「詠懷詩」八十二首中から二十首を選定載録し、併せて冒頭に（阮籍「詠懷」其一評に）次のような評価の言を付している（①～⑧の番号は、以下の考察の便宜のため、仮の章段として設ける）。

①晴月・涼風・高雲・碧宇之致、見之吟咏者、實自公始。但如此詩、以淺求之、若一無所懷、而字後言前、眉端吻外、有無盡藏之懷、令人循聲測影而得之。②唐人于「氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城」之下、必須補出「欲濟無舟楫、端居恥聖明」、不爾、如婢子聞人短長、禁令勿言則喉間作癢矣。世愈下、言愈煩、心愈淺也。

③歩兵詠懷、自是曠代絕作、遠紹國風、近出入於十九首、而以高朗之懷、脱穎之氣、取神似于離合之間。④大要如晴雲出岫、舒卷無定質、而當其有所不極、則弘忍之力、肉視荆・聶矣。⑤且其託體之妙、或以自安、或以自悼、或標物外之旨、或寄疾邪之思、意固徑庭、而言皆一致、信其但然而又不徒然、疑其必然而彼固不然。⑥不但當時雄猜之渠長、無可施其怨忌、且使千秋以還、了無覓脚根處。蓋詩之爲教、相求于性情、固不當容淺人以耳目薦取。⑦況公且視劉・項爲孺子、則人頭畜智者令可測公、不幾令泗上亭長反唇哉。⑧人固自有分際、求知音於老嫗、必白居易而後可爾。

「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」が見られるというこの冒頭での指摘こそが、王船山が阮籍「詠懷詩」に与えた詩史上での評価であると思われるが、文学史上での位置づけはしているものの、阮籍の描く自然景物の「致き」が特徴的であるとのみの指摘であり、以後の展開は抽象度の高い説明に止まっている。一体その「致き」とはどのようなものなのか。以下、この王船山の記述（上掲の①～⑧）に沿って考察を加え、具体化を試みたい。

—

①「晴月・涼風・高雲・碧宇の致きの、之れを吟咏に見る者は、実に公より始まる。但だ此くのごとき詩は、淺きを以つて之れを求むれば、一に懷ふ所無きがごときも、字後言前、眉端吻外に、無尽蔵の懷ひ有り、人をして声に循ひ影を測りて之れを得しめん。」

（「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」を詩に詠出することは、實際、阮籍から始まっている。ただ、阮籍「詠懷詩」其一のような詩は、浅い観点からのみ理解しようとする、思っていることが何も無いかのように見える。しかし、詩を書き付けた後、詠み始める前、皆の端の辺り、唇の動きとは別の所に、無尽蔵の思いが蓄えられていて、その声を追い、その影を追えば、それは人にも理解できるようになっている。）

冒頭に言う「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」とはどのような「致き」かを具体化するに当たり〈1〉、その指摘の直後に「此の詩のごとき」と続くので、まずは阮籍「詠懷」其一の「薄帷鑑明月、清風吹我衿」の「明月」と「清風」が醸す「致き」を言っているの

あろうことが明らかとなる。ただし、すでに述べたように、冒頭ではその格調の高さ、あるいはそれが無尽蔵であることをのみ指摘し、詳細は以下の説明の中に譲られることになる。そしてその際、其一には見えない「雲」と「宇」の「致き」が加えられている。すなわち、「詠懐」其二以下の阮籍の景物描写全体にも論及しようとする。

二

②「唐人は『氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城』の下に於いて、必ず須らく『欲濟無舟楫、端居恥聖明』と補ひ出だす、爾らずんば、婢子の人の短長を聞くに、禁令して言ふ勿からしむるがごとく則ち喉間に癢みを作さん。世愈いよ下れば、言愈いよ煩はしく、心愈いよ浅きなり。」

(唐人の場合は、孟浩然が「洞庭に臨む」詩で「氣は蒸す雲夢の澤、波は撼かす岳陽城」の句の後に、「済らんと欲するも舟の楫無く、端居して聖明に恥づ」と続けたように、必ず喋りたがる。そのようにしないと、侍女が他人の評判を聞いてしまい、言いふらさぬよう禁じられた時のように、喉の辺りに痒みを覚えるのである。世が下れば下るほど、言葉は饒舌になり、心は浅くなっていく。)

この②の章段に引かれている孟浩然「臨洞庭」詩「八月湖水平、涵虚混太清。氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城。欲濟無舟楫、端居恥聖明。坐觀垂釣者、徒有羨魚情」(八月湖水平らかに、涵虚は太清を混づ。……坐ろ觀る釣を垂るる者に、徒らに魚を羨むの情有るを)は、王船山『唐詩評選』では先ず頷聯に関して「頷聯較工部『吳楚東南』一聯爲近情理」(頷聯は工部の『吳楚東南』の一聯に較べて情理に近しと爲す)と一応の評価が与えられつつも、一篇全体では「猶齊・梁之有沈約、多取合于淺人、非風雅之遺意也。此作力自振拔、乃貌爲高而格亦未免卑下」(猶ほ齊・梁の沈約有るがごとく、多くは浅人に合ふを取り、風雅の遺意に非ざるなり。此の作は力めて自ら振ひ抜けば、乃ち貌は高きと爲すも格は亦た未だ卑下するを免れず)と貶しめられている。頷聯の「……聖明に恥づ」のような饒舌による浅薄さが詩全体を台無しにすると見るからであろう。

この②では、王船山は孟浩然の「臨洞庭」詩を引いて、「世愈いよ下れば、言愈いよ煩はしく、心愈いよ浅きなり」と言っているのだから、唐人に対しては『唐詩評選』中で指摘するような沈約の詩の「多くは浅人に合ふを取り、風雅に非ず、卑下すなり」というのと同じ感を抱いたことになる。ただし、孟浩然も自然景物を詠んだ前四句は「情理(を宣ぶるに)に近く」、杜甫「登岳陽樓」詩の景物描写「昔聞洞庭水、今上岳陽樓。吳楚東南坼、乾坤日夜浮。……」と較べても劣らない。阮籍の景物描写について言う「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」はそれらと同等であると王船山は指摘しているものと思われる。言うまでもなく六朝人阮籍の「詠懐」其一は「孤鴻號外野、朔鳥鳴北林」と続くので、浅人で下卑たお喋り侍女風の唐人孟浩然とは異なり、風雅の「致き」は損ねていない。

すなわち「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」とは、饒舌でなく、心浅からず、卑下せず情理を宣べ、儒の風雅の理念を損ねることのない景物の「致き」である、ということが

先ず明らかとなる。

三

③「歩兵の『詠懐』は、自ら是れ曠代の絶作にして、遠くは『国風』を紹ぎ、近くは『十九首』に出入し、而して高朗の懐ひ、脱穎の氣を以つて、神似を離合の間に取る。」

(六朝人阮籍の「詠懐詩」は稀代の傑作であつて、遠くは『詩経』の「国風」を継ぎ、彼に近い時代では「古詩十九首」を継いでいて、阮籍はそれらと接触した際に、自らのもち前の「高朗の懐ひ、脱穎の氣」を用いてそれと神似することが出来ている。)

阮籍「詠懐詩」は、怨むも言はず、誹るも乱れない、節度ある「小雅」から出るとするのが『詩品』以来の通説であるところを、王船山はその説を採らず、色を好むも淫れない、風雅な「国風」を継ぐとしている。『詩品』では「十九首」が「国風」を継ぐとされるが、王船山は、阮籍みずからが元来持つ「高朗の懐ひ、脱穎の氣」が働き、それらの直系となることで、浅からず、卑下せず、怨み誹りを超越した風雅な「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」を入手した、と見ている。

四

④「大要は晴雲の岫を出づるがごとく、舒卷として定質無きも、而も当に其れ極まらざる所有るべく、則ち弘忍の力は、荆・聶を肉視せり。」

(それは概ね蘇軾の言う「晴雲の岫より出づるがごとく、舒卷として定質無し」であり、当然極まらざる所が有って、その持つ忍びに忍ぶ力は、刺客の荆軻や聶政を「肉視」しているのである。)

次いで王船山はこの④の章段で「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」を「晴月・涼風・高雲・碧宇」という四景物中の「高雲」一景で代表させて明らかにする。それは空を行く雲であつて、極まる所の無い「致き」ということになる。

これは阮籍自身が自らの真なる表現を「雲」に喩え、「答伏羲書」の中で「玄雲に定体無し」と言い、さらにそのような自らを「弘脩淵邈なる者・靈變神化する者」と言っているのに基づいている(2)。そして王船山は、後述するように、「擬『詠懐詩』」の中でこの「答伏羲書」中の「玄雲無定體」を阮籍「詠懐詩」の景物描写の特徴として転用し、同時に阮籍その人の真なる表現の喩えにも用いて行く。

しかし蘇東坡が「答謝民師書」で「所示書教及詩賦雜文、觀之熟矣大。略如行雲・流水、初無定質、但常行於所當行、常止於所不可不止、文理自然姿態橫生。孔子曰『言之不文、行而不遠。』又曰『辭達而已矣。』……」(示す所の書教及び詩賦雜文は、之れを觀て熟すること大なり。略ぼ行雲・流水のごとく、初めは定質無きも、但だ常に当に行くべき所に行き、常に止まらざるべからざる所に止まる、文理自然にして姿態横まに生ず。孔子曰はく『言の文ならざるは、行くも遠からず』と。又た曰はく『辭達するのみ』と。……)と言うように、それは当初は定質が無いように見え、やがては行き着くべき所に行き着く

「致き」でもある。

王船山は、曹操「秋胡行」詩評でも「蘇子瞻所云『行雲・流水、初無定質』」について、「維有定質、故可無定文」と言っている。「初めは定質無し」ではあるが、やはり最終的には「これ定質有り」となる「致き」である。

それは、『左傳』襄公二十五年の条の「言之無文、行而不遠」、および『論語』衛靈公篇の「辭達而已矣」を踏まえていることから知られるように、詩文は言い方は遠回しでも気持ちが伝えられれば好いとする儒の理念に行き着く。

そのことに関しては王船山は、自らの史観を述べた『讀通鑑論』の卷二十五「唐憲宗」三に、「文章之用、以顯道義之殊塗、宣生人之情理、簡則難喻、重則增疑。故工文之士、必務推邊宛折、暢快宣通、而後可以上動君聽、下感民悅。於是游逸其心於四維上下、古今巨細、隨觸而引伸、一如其不容已之藏、乃爲當世之所不能舍。則蘇軾所謂『行雲・流水、初無定質』者、是也。……」（文章の用は、道義の塗を殊にするを顯らかにし、生人の情理を宣ぶるを以つてするも、簡なれば則ち喻え難く、重なれば則ち疑ひを増す。故に工文の士は、必ず推邊宛折、暢快宣通に務め、而る後以つて上は君の聴くを動かし、下は民の悦ぶを感じしむべし。是に於いて其の心を四維の上下、古今の巨細に游逸せしめ、触るるに随ひて引伸し、一ら其れ容に已むべからざるの蔵のごとく、乃ち当世の舍く能はざる所と爲る。則ち蘇軾の所謂「行雲・流水、初めは定質無き」者、是れなり。……）(3)という詳細な説明を展開し、詩文は言い方は遠回しでも気持ちが伝えられれば好いとは、逆に「簡なれば則ち喻え難く、重なれば則ち疑ひを増す」とならない、些か遠回しの、あるいは節度ある表現によって、主君に聴かせ民を悦ばせるのであるとする。すなわち儒の風雅の理念であるが、それを「行雲・流水、初無定質」と説いたものと思われる。

そこで王船山は、その「雲」を阮籍を模倣対象とした擬作「擬『詠懷詩』」の中で頻用し、「浮雲……連蟻相異態、奄忽如有憑」（浮雲は……連蟻として態を相異にし、奄忽として憑る有るがごとし「其三」）、「浮雲無歸蹤、消滅有良然」（浮雲に帰る蹤無く、消滅に良に然る有り「其三十」）「夏雲……歛爾清風生、動宕無恆居」（夏雲は……歛爾として清風生ずれば、動宕として恒には居る無し「其七十一」）等と詠んでもいる。

例えば、「擬『詠懷詩』」其十八では、次のように詠む。

浮雲起東南	浮雲東南に起こり
悠然驚西北	悠然として西北に驚す
駛影無淹留	駛影は淹留する無く
凝望滋迷惑	凝望すれば滋すます迷惑す
前者既蕭散	前む者は既に蕭散と
後來空閔默	後れて来たるは空しく閔默す
豈爲仰觀者	豈に仰ぎ観る者のために
佇迹從察識	迹を佇めて察識に従はんや

……

これは阮籍の景物描写の特徴を詠んでいると同時に、阮籍その人の真なる表現の「定体無き」特徴をも捉えている。それを王船山は儒の理念として定義のより明確な蘇東坡「答謝民師書」の「行雲……初無定質」を用い、新たに言い換えている。

したがって、阮籍の景物描写の特徴および真なる表現は「雲」のように「定体」「定質」が無く、人の「察識」に従ってはくれないものであると言う。

それは阮籍自身が「弘忍の力」で忍びに忍び、真の表出を露わにしていないからである。勿論それでも行き着くところはある、それが刺客の荆軻・聶政の「肉視」(4)であり、後述するように項羽や劉邦、延いては司馬昭のような権力者の「孺子(豎子)」視である、と王船山は続ける。

もちろん阮籍は「弘忍の力」によって表現を堪え、それを直接的な言動に表してはいない。項羽・劉邦に間接的に言及したとは『晉書』にあるが、荆軻・聶政にはもはや言及していない。阮籍が「荆・聶」の手法を採らなかつたのは、刺客は「仁を踏む」ことに反するからであると、王船山は見る。

王船山自身は、聶政には言及していないものの、荆軻については、「仁を踏む」の反証として『讀四書大全説』論語衛靈公篇において彼を例に取り、「殺身以成仁則宜、殺身以求仁則不可、故知蹈死者之非能蹈仁也。秦始皇之流毒甚矣、荆軻之刺之、豈曰不當。然軻所以不得爲仁者、非軻所當成之仁而刺之、則非誅暴之道。徒蹈死地以求仁、便是爲名、非天理人心固有之理。此與蹈水火者同、非蹈仁也」(身を殺して以つて仁を成せば則ち宜しきも、身を殺して以つて仁を求むれば則ち不可なり、故に死を踏む者の能く仁を踏むに非ざるを知るなり。秦始皇の毒を流すは甚しく、荆軻の之れを刺すは、豈に不当と曰はんや。然れども軻の仁と爲すを得ざる所以の者は、軻の当に成すべき所の仁に非ずして之れを刺せば、則ち暴を誅するの道に非ず。徒らに死地を踏みて以つて仁を求むれば、便ち是れ名のためにして、天理人心固より有するの理に非ず。此れ水火を踏む者と同じく、仁を踏むに非ざるなり)と言っている。このように視ることが「肉視」であろう。そしてそのように「肉視」する際に、「弘忍の力」を阮籍は必要としたとする(5)。

王船山は『古詩評選』の中でよく「忍力」という語を用いる。この語はもともと仏教要語で、「古詩」の特徴を捉える評語の一つとして借用されている(6)。

この「忍力」についての詳細は稿を改めて論ずる必要があるが、王船山は『讀四書大全説』孟子公孫丑上篇で「『忍』者、情欲發而禁之母發、須有力持之事焉」(「忍」とは、情発せんと欲して之れを禁じて発する母からしむるに、須らく力めて持するの事有るべし)と言う。文意を浅くしないために、逆に情の発露を禁じ、言動や表現をあからさまにしない「力」を、概ね言うものと思われる。やはり既述の儒の風雅の表現手法に通ずる。

そして王船山は阮籍の立場に立ち、やはり「擬詠懷」詩で自らの得心のいく荆軻像を詠み、その「弘忍の力」を用いて「肉視」する。例えば、

其十一

燕臺多高風 燕台には高風多く

易水揚洪波	易水は洪波を揚ぐ
白日照綺疏	白日は綺疏を照らし
冠蓋相經過	冠蓋相經過す
蹕厲古今間	蹕厲たり古今の間
感慨何其多	感慨何ぞ其れ多きや
望諸無返駕	望諸は駕を返す無く〈7〉
洄上計復訛	洄上も計復た訛る〈8〉
黄金臺已蕪	黄金台已に蕪れ
北望空山阿	北のかた空山の阿を望む
宋子迹云遠	宋子迹云に遠ければ〈9〉
誰爲紹悲歌	誰か為に悲歌を紹がんや〈10〉

と詠み、また、

其三十九

酌酒歌生平	酒を酌みて生平を歌ひ
疇昔互不忘	疇昔互に忘れず
燕臺振悲吟	燕台悲吟を振るへば
哀風爲飄揚	哀風為に飄揚す
磨劍寒水濱	劍を寒水の浜に磨けば
星月灼鋒鋌	星月は鋒鋌に灼く
誓身茵露間	身を誓ふ茵露の間
聊充烏鳶腸	聊か烏鳶の腸を充たさんことを
堂上悲白髮	堂上に白髮を悲しむも
恩愛不得將	恩愛は將ゐるを得ず
耿懷躓中路	耿懷は中路に躓き
宵且泣霑裳	宵且泣きて裳を霑す
吞聲無能宣	声を呑みて能く宣る無きは
義命各有方	義命各おの方有ればなり〈11〉

と詠む。

阮籍がもしも「荆・聶」を詠むならこのように詠むと言わんばかりであるが、荆軻を「肉視」するとはこれらの擬作に詠むように視ることかと思われる。国を救えぬ「秀士」や死して名を残すことにのみ奔る「壯士」が阮籍の原詩に詠まれるが、それは王船山に拠れば「悲歌」「悲吟」の対象としかならない士であって、英氣・英風が計の成功に繋がない者である。それは「仁を踏む」に反しているからであろう。阮籍の一見「定質」の無い表現の行き着くところは、王船山に由れば、一つはそこではないか。阮籍は直接的な行動に出て失敗することのない、「訛らぬ」「躓かぬ」士であることを志向した、と王船山は見る。それには「仁を踏む」表現をすることが欠かせない。荆軻の手法とは異なる、あから

さまを避けた、節度ある儒の風雅の表現により、孺子司馬昭らを阮籍は刺す。

五

⑤「且つ其の託体の妙は、或は以つて自ら安んじ、或は以つて自ら悼み、或は物外の旨を標し、或は邪を疾むの思ひを寄せ、意は固より徑庭なるも、言は皆一致し、其れ但だに然るのみなりと信ずれば而も又た徒には然らず、其れ必ず然るかと思へば而も彼固より然らざるなり。」

(しかも阮籍の比喻仮託表現の絶妙さは、自らを安堵させたり、自らの心を痛めたり、現象外の哲学を表現したり、邪悪を憎む思いを込めたり、意味する所はなるほどそれぞれであるが、言葉は皆同じであって、言うことを単にそうだと思うと単にそうではないし、果たしてそうだろうかと思ふとそれはその通りそうではないのである。)

「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」のある阮籍の景物描写は、「玄雲・高雲」のごとくに意味する所はそれぞれの受け取り方がなされるが、言わんとする所は一に帰する。それを成立させているのが「弘忍の力」であるということになる。

六

⑥「但だに当時の雄猜の渠長の、其の怨忌を施すべき無きのみならず、且つ千秋以還をして、了に脚根の処を覓むる無からしむ。蓋し詩の教へたるや、性情に相求められ、固より当に浅人の耳目を以つて驚りに取るを容るべからざらん(12・13・14)。」

(したがって猜疑心の強い当時の領袖司馬昭に、怨みを抱かれなかつただけでなく、千年来、志の根底にあるものを探られないでいる。思うに、『詩経』の「溫柔敦厚」の教えというものは、人の性情により知られるものであつて、もとより浅薄な人が耳目を使って頻りに知ろうとしても無理であろう。)

王船山は『宋論』卷九「四、馬伸請張邦昌復辟」で、「曹操之雄猜也、徐庶以劉先主之故、終身不爲一謀。操能殺荀彧而不能殺庶、委順何爲也、然猶曰庶未嘗觸操之忌也。司馬昭之狠也、阮籍爲艸表、而以箕穎之節期之。昭能殺嵇康而不能殺籍、隱黙何爲也、然猶曰微辭而未斥言之也」(曹操の雄猜なるや、徐庶は劉先主の故を以つて、終身ために一たびも謀らず。操能く荀彧を殺すも庶を殺す能はざるは、委順何をか為さんや、然れば猶ほ庶は未だ嘗て操の忌むに触れずと曰ふがごときなり。司馬昭の狠るや、阮籍はために表を艸するも、而も箕穎の節を以つて之れを期す。昭能く嵇康を殺すも籍を殺す能はざるは、隱黙何をか為さんや、然れば猶ほ微辭にして未だ之れを斥言せずと曰ふがごときなり)(15)と言っている。堯から天下を譲ろうと言われた隱士の許由は汚れた耳を潁水で洗い、同じく隱士の巢父はその汚れた潁の水を牛に飲まさず、ともに箕山に隠れた。阮籍も彼ら「潁水の隱士」と同然であり、「箕山の節」を通したために、司馬昭に殺されることが無かつたと言う。それは「隱黙」であつたためではなく、諷刺は含んでも決して明言しなかつたからである。すなわち「『詩』の教へ」に通ずる。③で述べた「国風」の風雅の理念が阮

籍「詠懐詩」全体の景物描写を支配し、心の奥底を覚られることなく、忍力が黙秘を超え「詩教」すなわち「溫柔敦厚」となって現れている（詩が陥りがちな、深まらずに「愚」に失するというようなことはない）、とする。ここで「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」がいつそう明らかとなる。

七

⑦「況んや公は且く劉・項を視て孺子と為せば、則ち人頭の智を畜ふる者の公を測るべからしむるも、泗上の亭長をして唇を反さしむるに幾からざるをや。」

（まして阮籍は劉邦や項羽をしばし孺子と看做していたのだから、いっばしの知者が阮籍を推し測ったところで、初め泗上の亭長となった劉邦のような輩に唇をこれっぽっちも尖らさせないのはなおさらである。）

この⑦の章段では「高雲の致き」の行き着くところとして、項羽も劉邦も「英雄」でなく「孺子」と視る。同様に司馬昭をも「孺子」と視るが、それと明言せずに、詩を読む者にそれと知らしめている。「孺子」を「孺子」と言わずに「孺子」たらしめるのが阮籍の「致き」であり（16）、儒の「辞達す」が完遂することになる。

八

⑧「人には固より自ら分際有り、知音を老嫗に求むるは、必ず白居易にして而る後爾るべし。」

（詩人にはもとより分相応というのがある。理解者を老嫗に求めようとして分かり易くしたのは白居易以降の詩人である。）

阮籍は自らの理解者を世俗には求めなかった時代の詩人であるから、むしろ意図的に明言しない方針で詩を作っている、「孺子」を「孺子」と明言して詩を饒舌にし、心を浅くした白居易ら中唐以降の詩人とは異なる、と王船山は最後を括る。

王船山は陶潜「歸田園居」詩評でも「……若以近俚爲平、無味爲淡、唐之元・白、宋之歐・梅、據此以爲勝場、而一行欲了、引之使長、精意欲來、去之若驚、乃以取適老嫗、見稱蠻夷、自相張大、則亦不知曝背之非暖、而欲獻之也。……」（……若し以つて俚に近きは平と為し、味無きは淡と為さば、唐の元・白、宋の歐・梅は、此れに抛りて以つて勝場と為し、而して一たび行ひて了らんと欲すれば、之れを引きて長ぜしめ、精意来らんと欲すれば、之れを去ること驚るがごとく、乃ち適を老嫗に取るを以つて、蛮夷と称せられ、自ら相張大すれば、則ち亦た背を曝すの暖きに非ざるを知らず、而して之れを獻ぜんと欲するなり。……）と言っている。

陶淵明の詩の境地は、俗に近いので「平」、味が付いていないので「淡」というのではない、もしもそうであるならばそれは「適を老嫗に取る」ということになる。しかし「知音を老嫗に求む」は元・白、歐・梅の独擅場であって、陶はその対極にある。阮も陶と同じく、「知音を老嫗に求む」ということはしなかった。

王船山の阮詩評選の意図は、阮籍「詠懐詩」の景物描写の極まる所を明らかにするのが主目的ではなく、それはすでに司馬昭の孺子視に行き着くと決まっているものの、刺客荆軻のような儒の理念に反する直接的な表現手法は採らず、一見「定質無し」ではあるが、そこは忍力で堪え、『詩』国風の風雅の理念を紹いで、詩の教え「溫柔敦厚」が現れるべく、一人の儒として誹る怨むを超越した表現を行った、ということをもしる指摘している。それが「晴雲の岫を出で、舒卷として定質無し」とも言える阮籍「詠懐詩」の景物描写「晴月・涼風・高雲・碧宇の致き」の具体化ということになるのではないか。

結語

阮籍「詠懐詩」の難解さを、その景物描写に注目し、そこにはいわば儒の直言・斥言を避ける「致き」が支配しているからであると指摘し、阮籍を道家者ではなく、当時の儒家の実践者の一人として位置づけようとしている点が、王船山の創見による文学史上の阮籍および「詠懐詩」評価と言えよう。

阮籍はもとより「言を発すれば玄遠、口に人物を臧否せず」の人であるが、その文学の目的は司馬昭らの批判というよりも、むしろ彼ら雄猜を孺子視し、ものを言わせないことに在ったのではないかということが見えてくるように思われる。その詩表現が誹りや怨みを超越し、溫柔敦厚を志向しているというのはそのためであろう。王船山はその点を『古詩評選』冒頭の評価の言で指摘しているものと考えられる。

註

(1) 「晴月・涼風・高雲・碧宇」の四景物は、それぞれ阮籍の詩文中にそのままでは現れず、たとえば「……清陽曜靈、和風容與。明月映天、甘露被宇。……」（四言「詠懐」其一）等のように現れている。語の典拠は未詳であるが、箇々の語は、「晴月」は例えば、劉基「題墨竹」に「風梢舞空烟、露葉滴晴月」と見え、また王船山「續哀雨詩」四首之二「晴月嵐平北斗移、挑燈長話桂山時。」と見える。同様に、「涼風」は王船山「擬阮步兵詠懐」其三に「涼風西南來、吹此浮雲興」と見え、「高雲」は嵇康「兄秀才公穆入軍贈詩」に「仰訊高雲、俯託輕波」と見え、「碧宇」は船山の敬愛する劉基や宋濂らの師である儒者呉萊の「雙林寺…」詩に「青檣並聳碧宇上、落葉散到人家村」と見える。

(2) 阮籍「答伏羲書」に「……玄雲無定體、應龍不常儀。或朝濟夕卷、翕忽代興、或泥潛天飛、晨降宵升。舒體則八維不足暢迹、促節則無間足以從容。是又瞽夫所不能瞻、瓊蟲所不能解也。然則弘脩淵邈者、非近力所能究矣、靈變神化者、非局器所能察矣。……」とある。

(3) 「推盪」は、『易』繫辭・上「八卦相盪」に基づき、運行推移する意。

(4) 「肉視」は、張九齡「獅子贊序」に「肉視犀象、孩撫熊羆」とある等、重視しないこと。他にも、「肉視具寮忘七箸、氣吞同列削寒温」（李德裕「失題」詩、あるいは温庭筠「題李衛公詩」とも）、「以寡制衆、彼雙我獨、雖言肉視、詎得心服」（徐夔「卜莊子刺

虎賦）、「肉視羣后、孩撫朕躬」（『通鑑』卷第二百九十一）、「郡縣虎冠之吏、肉視大家」（吳偉業「孫母郭儒人壽序」）、「餓狼餒虎、肉視吾民」（王應麟「攷史」）、「讐家肉視我、張吻誓咀嚼」（陳迦陵「哭故友周文夏侍御五言古一百韻」）、「荆卿游燕市、酒酣意氣壯。……秦王肉視燕、眇若廷無人。……」（彭孫貽「燕山懷古」六首之三）、「王峻身爲朝廷重臣、驕橫專權、輕慢綱紀、肉視羣臣、僭凌朕躬、貪婪無度、有負衆望、……」（『趙匡胤』第十八章「苗訓透玄机」）、「官啖其富、肉視之。」（『聊齋誌異』卷三「小二」）等に用例が見られる。

〈5〉荆軻については、王船山『古詩評選』左思「咏史」詩評にも「詠荆軻詩古今不下百首、屑屑鋪張、裏袖揎拳、皆浮氣耳。惟此蘊藉春容、偏令生色。余不滿太白『經下邳圯橋』詩、正以此故。以赭塗面、挂髮爲髻、優人之雄、何足矜也。荆卿英氣、正在高歌燕市時、到易水餞別、已自潦倒。咏史須具此眼、方于古人有相料理處。」と言う。

李白が「經下邳圯橋懷張子房」詩（『唐詩評選』には載せず）で「子房未虎嘯、破産不爲家。滄海得壯士、椎秦傳浪沙。報韓雖不成、天地皆振動。潛匿遊下邳、豈曰非智勇。我來圯橋上、懷古欽英風。唯見碧流水、曾無黃石公。嘆息此人去、蕭條徐泗空。」と詠んだような芝居の役者のごとき刺客（張良が起用した、始皇帝に椎を下した士）は、矜るべき気概が捉えられておらず、不満がある、荆軻を詠むのなら易水の餞別の場面ではなく、燕市で高らかに歌っている場面に、その生き生きとした顔つきや英氣を看取すべきであると言う。

〈6〉「忍力」という語は、『唐詩評選』および『明詩評選』には見あたらない。『古詩評選』にのみ、古樂府雜曲「羽林郎」詩評「……文筆之差、繫於忍力也。如是不忍則不力、不力亦莫能忍也。」、李陵「與蘇武」詩評「……空杳之跡微、大忍之力定、……」、曹操「碣石篇」詩評「愈緩愈迫、筆妙之至。惟有一法曰忍。忍字固不如忍篇。」、左思「招隱」詩評「……心神之間有忍力、要以成乎作者。十九首固有此體製矣。」、鮑照「和王義興七夕」詩評「役心極矣、而絕不汎瀾。引滿之餘、大有忍力。」、楊素「山齋獨坐贈薛內史」詩評「……『深溪橫古樹』以下、平演八句、定忍之力如此、何憂其不整暇耶。……」等と見える。

或いは陳獻章「忍字贊」（『白沙子』卷四）の「七情之發、惟怒爲遽。衆逆之加、惟忍爲是。絶情實難、處逆非易。當怒火炎、以忍水制。忍之又忍、愈忍愈勵。過一百忍、爲張公藝。不亂大謀、其乃有濟。如其不忍、傾敗立至。」を踏まえるか（「張公藝」は『資治通鑑』卷第二百一に「壽張人張公藝、九世同居、齊隋唐皆旌表其門。上過壽張、幸其宅、問所以能共居之、故公藝書忍字百餘以進。上善之賜以纁帛。」と見える）。

〈7〉望諸君樂毅は燕を去った。

〈8〉「涇上」は蘇秦の流されたところ。

〈9〉「宋子」は高漸離を指す。

〈10〉阮籍「詠懷」其十一（『古詩評選』登載）「湛湛長江水、上有楓樹林。皐蘭被徑路、青驪逝駸駸。遠望令人悲、春氣感我心。三楚多秀士、朝雲進荒淫。朱華振芬芳、高蔡相追

尋。一爲黃雀哀、涕下誰能禁。」を原詩とする。

〈11〉阮籍「詠懷」其三十九（『古詩評選』には登載されず）「壯士何慷慨、志欲威八荒。驅車遠行役、受命念自忘。良弓挾烏號、明甲有精光。臨難不顧生、身死魂飛揚。豈爲全軀士、效命爭戰場。忠爲百世榮、義使令名彰。垂聲謝後世、氣節故有常。」を原詩とする。

〈12〉「雄猜」は、謝靈運「擬魏太子鄴中集八首」序に「漢武帝時、徐樂諸才備應對之能、而雄猜多忌、豈獲晤言之適。」とあり、注に「向日、武帝剛彊疑忌、亦不得明言對之善。」と言う。また歐陽脩「泰誓論」に「以紂之雄猜暴虐、嘗醢九侯而脯鄂侯矣。」と見え、『資治通鑑』にも「秦皇嚴肅雄猜、而荆軻奮其陰計。」と見える。

〈13〉「脚根」は志の根底にあるものを言い、「當謹守聖賢訓戒、以爲根脚。」（朱熹「答滕德粹」）とある等、王船山の信奉する朱子の常套愛用語としても知られる。

〈14〉王船山は朱子を祖述することがあるので、「詩教」に関しては或いは『論語』爲政篇の「思無邪」説を採っているかも知れないが、今は暫く措き、「思無邪」説は「怨而且怒」であって「怨而不怒」ではないとする孫明君の論ずる所に従い、通説の『禮記』經解篇「孔子曰、入其國、其教可知也（鄭氏註、觀其風俗、則知其所以教）。其爲人也、溫柔敦厚、詩教也。……故詩之失、愚。……其爲人也、溫柔敦厚而不愚、則深於詩者也。」に言う「溫柔敦厚」説を採っておく（孫明君『漢魏文学与政治』商務印書館 2003 年所収の「詩可以怨」論による）。

〈15〉「斥言」は、直言、明言。「微辭」は、婉曲ではあるが風刺を含む語。明の楊慎『詩話補遺』に「……蓋當是時、魏明帝郭后・毛后、妬寵相殺、正類武靈王事、故隱語怪説亦春秋定哀多微辭意也。顏延年曰、阮公身事亂朝、常恐遇禍、因茲詠懷、雖志在譏刺、而文多隱避、百代之下、難以情測。故粗明大意、畧其幽旨也、信哉。」とあり、明の張溥「漢魏六朝百三家集」題詞にも「……詠懷諸篇、文隱指遠。定哀之際多微辭、蓋斯類也。」とある。

〈16〉『晉書』阮籍傳に「嘗登廣武、觀楚漢戰處、嘆曰『時無英雄、使豎子成名。』」とある。また、王船山は阮籍「四言詠懷」詩の評でも「曹公『月明星稀』四字、欲空千古。嗣宗以『天高氣寒』敵之、綽有餘矣。如使相逐中原、英雄・孺子、未知定屬阿誰。」という言い方をしている。「英雄」の反対概念として「孺子」はある。「畜智」は、「孫卿子曰、聖人畜仁而不主仁、畜智而不主智、畜勇而不主勇。」と見える等。「泗上亭長」は劉邦が就いた最初の職。『論衡』紀妖篇に「漢高皇帝以秦始皇崩之歲、爲泗上亭長」と見える。「反唇」は、心中不服のために唇だけが動くことから、相手に対する不満、反対、対立を表す。『史記』平準書に「張湯又與顏異有隙、及人有告異以他議、事下湯治異。異與客語、客語初令下有不便者、異不應、徵反唇。湯奏異當九卿見令不便、不入言而腹誹、論死。自是之後、有腹誹之法、而公卿大夫多諂諛取容矣。」とある。